

1. 2018 年度 活動報告

研究代表 原田博夫

研究経過と概要

本研究プロジェクト「アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築」(2014 年度～2018 年度)は、2014 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択された。研究代表・原田博夫、研究推進責任者・嶋根克己、事務局長・金井雅之の下、「経済・ビジネス研究 (チーフ・神原理)」「ソーシャル・リスク・マネジメント研究 (チーフ・大矢根淳)」「ソーシャル・キャピタル研究 (チーフ・飯沼健子)」の3つのグループでの研究活動を基本に、研究メンバーは総勢30名(センター研究員12名、客員研究員17名、PD1名)である。

外部の研究機関との交流・提携

本研究センターでは、国内外の研究機関との交流・提携を恒常的に継続する観点から、積極的に組織間交流協定に取り組んできた。国際交流組織間協定に関しては、2014 年度にはベトナム社会科学院社会学研究所(2015 年3月)と、2015 年度はタイ・チュラロンコン大学社会調査研究所(2016 年3月)と、2018 年度は韓国・ソウル国立大学アジア研究所社会科学資料院(KOSSDA)(2018 年4月)と締結することができた。国内では、学術交流・協力に関する覚書を、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設(ROIS-DS)社会データ構造化センターとの間で、取り交わした(2018 年3月)。

こうした組織間協定は、そもそもアジア各国をベースにした本研究コンソーシアムが個々の研究者の繋がりを起点にしながらも、それを組織的・継続化する上では重要な契機となっている。本研究センターへの文部科学省助成の終了する次年度以降も、継続・更新を基本方針としたい。

研究成果

本研究センターのもっとも中心的な研究活動である社会(アンケート)調査「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」は、2014 年度に日本、2015 年度は韓国(実施機関はソウル国立大学アジア研究所)とベトナム(実施機関はベトナム社会科学院社会学研究所)で、2016 年度はタイ(実施機関はチュラロンコン大学社会調査研究所)とフィリピン(実施機関はアテネオ・デ・マニラ大学)で、2017 年度は台湾(実施機関は中央研究院)とインドネシア(実施機関はインドネシア大学社会政治科学部社会学研究室)の、7カ国・地域で実施した。これらの調査報告の概要は、それぞれ機関誌(英語版) *The Senshu Social Well-being Review* に掲載されている。

2018年度に実施した、本研究センター・メンバーに加えて本研究コンソーシアム・メンバーによる、海外・国内での会議・学会への出張などは以下の通りである。

(1) 2018年6月14日(木)～16日(土)、香港・香港理工大学(Hong Kong Polytechnic University)でテーマ“Promotion of Quality of Life in the Changing World”の下に開催された16th International Society for Quality-of-Life Studies (ISQOLS) (「生活の質」研究国際会議)で、本センターの研究成果をまとめた2つのシンポジウムを開催した。本研究センター研究員2名、客員研究員1名、PD1名が参加・発表し、海外のコンソーシアム・メンバーからも、5名が参加・発表した。

(2) 2018年7月15日(日)～21日(土)、カナダ・Metro Toronto Convention Centerでテーマ“Power, Violence and Justice: Reflections, Responses and Responsibilities”の下に開催されたThe 19th International Sociologist Association (ISA) World Congress of Sociologyで、本研究センター研究員2名と客員研究員2名、および海外のコンソーシアム・メンバー3名が参加・発表した。

(3) 2018年9月7日(金)～15日(土)、一帯一路日本研究センターの訪中団の一員として、本研究センター・原田博夫代表は中国を訪問し、瀋陽社会科学院、遼寧大学、大連外国語大学、国务院建設部、中国共産党中央対外連絡部、日本大使館、一帯一路城市連盟、中国全球化シンクタンクなどで、本研究センターの成果を踏まえたスピーチ・説明を行ってきた。

(4) 2018年9月25日(火)～28日(金)、福岡国際会議場でテーマ“Security and Equality for Sustainable Futures”の下に開催された4th World Social Science Forumで、本研究センター研究員1名、および海外のコンソーシアム・メンバー1名が参加した。

(5) 2018年10月5日(金)～7日(日)、星槎大学箱根キャンパスでテーマ“Interconnections, Social Transformation, and Global Mobility: Exploring Possible Ways towards the Future”の下に開催された第14回アジア太平洋社会学会(APSA)大会で、本研究センター研究員3名・客員研究員1名が参加した。この大会には、海外のコンソーシアム・メンバーも多数、参加していた。

(6) 2018年10月27日(土)～11月5日(月)、本研究センター・飯沼健子研究員はベトナム・ベトナム社会科学院(VASS)、タイ・チュラロンコン大学社会調査研究所(CUSRI)を訪問し、アセアン地域統合における低開発地域カンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナム(CLMV)への支援について格差是正とウェルビーイングの視点から学術交流と情報収集を行った。

(7) 2018年11月27日(火)～29日(木)、韓国・仁川でテーマ“The Future of Well-being”の下に開催された6th OECD World Forum of Knowledge and Policyで、本研究センター研究員2名が出張・参加した。現地では、本コンソーシアムに関連した参加者(韓国人、オランダ人)と意見交換できた。

(8) 2018年12月6日(木)、韓国・ソウルでテーマ“Does City Living Make Us Happy?”の下に開催されたInternational Conference on the Well-Being and Quality of Life in the Cityで、本研究センター研究員1名、コンソーシアム・メンバー2名が招待講演を行った。

(9) 2018年2月10日(日)～2月12日(火)、アラブ首長国連邦UAEドバイで開催された7th World Government Summit & 3rd Global Dialogue for Happiness and Wellbeingに、本研究センター・原田博夫代表が招聘され、現地で各種の意見交換をし、本研究センターのテーマ「ソーシャル・ウェルビーイング」の今後の新たな展開の可能性を探った。

本学内での2018年度研究会は、第28回(2018年10月19日(金)、カローラ・ホメリヒ(北海道大学))、第29回(2019年2月7日(木)、Suk-Ki Kong(ソウル国立大学アジア研究所研究教授SNUAC Research Professor))、第30回(2019年3月18日(月)、社会科学研究所の定例研究会と共催)の、計3回行った。

成果の発表・公開・発信

本研究センターでは、英語と日本語の機関誌をそれぞれ年に1冊ずつ刊行しており、英語論集*The Senshu Social Well-being Review* No.5は2018年12月に刊行し、日本語論集『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』第5号も2019年3月末に刊行予定である。

2017年度から始まった編集体制の確立(論集編集委員長・大矢根淳(本研究センター研究員・人間科学部教授))・投稿規定の明確化(英語論集についてはAmerican Sociological AssociationのStyle Guide第5版(2014)に、日本語論集については日本社会学会の社会学評論スタイルガイド第2版(2009)に準拠)に加えて、両雑誌の紙面をより学術雑誌のスタイルにするという方針も明確になった。また、今年度の英語論集では原著論文8本、調査報告2本を掲載することができた。この英語論集*The Senshu Social Well-being Review*に関しては、海外のコンソーシアム・メンバーからも本研究センター終了後(2019年4月以降)も継続を求める声が大きいため、これに応えるべく、取り組んでいきたい。

本研究センターが2014年度から2017年度にかけて実施した社会(アンケート)調査「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」は本研究コンソーシアムのいわばプラットフォームだが、本研究プロジェクト終了後のデータ公開に向けて、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センター(ROIS-DS)や韓国(ソウル国立大学アジア研究所)・台湾(中央研究院)のコンソーシアム・メンバーと共同で2017年秋以降、データ・クリーニングへの取り組みを行うことで、少なくとも3カ国のコンソーシアム・メンバー間では課題・問題点などに関する共通認識が高まっている。

さらに、この研究プロジェクトの成果を国際的に発信するために、Springer 社から、コンソーシアム・メンバーの全体（8カ国）が関与する形での書籍を刊行（2020年出版予定）するべく、2018年末から企画を順次準備している。

若手研究者（PD・RA）の育成

矢崎慶太郎氏は、2014年8月にRAとして採用され、2015年4月以降はPDとして業務を担当している。矢崎氏は、本研究センターの社会（アンケート）調査「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」データの整理や集計作業に尽力しているほか、英語論集、日本語論集の編集に貢献し、国内外の学会や研究会でも本センターに関連した研究報告を精力的におこなっている。海外コンソーシアム・メンバーからの認知度も高まっており、今後の更なる活躍が期待できる。

以上